

2006年度YOC報告書

-
- 【大会】 ヤング・オフィシャル・キャンプ2006
【日時】 2006年8月11日（金）～13日（日）
【場所】 埼玉県立スポーツ研修センター
【受講者】 鍋嶋 幸富

1. 報告者	鍋嶋 幸富 (クラブ連・公認2年目)		
2. 大会名	ヤング・オフィシャル・キャンプ2006		
3. 日時	2006年8月11日(金)～13日(日)		
4. 場所	埼玉県立スポーツ研修センター		
5. 従事した試合			
	回戦	Aチーム	VS
	主審	副審	講師
①	8月11日	都駒場高校	VS
	井口氏(徳島)	鍋嶋	安西 郷史氏
②	8月12日	上尾南高校	VS
	鍋嶋	東郷氏(宮崎)	吉田 利治氏
③			VS
6. 感想	<p>3日間の講習会に参加して、これから自分が審判の向上を目指していく中で貴重な体験になりました。最初は京都からたった一人の派遣ということもあり、他の講習会への派遣とは違い、少しプレッシャーありました。しかし、自分の中で必ず何かものにしようと強く想うことで、講習会に積極的に取り組むことができました。</p> <p>YOCは、今年から講習生が38人となりました。そのため、講師(国際審判員)の方々との講習生が審判をしている時に試合を見ながら指導を受けたり、こちらから質問ができる機会が多くあり大変勉強になりました。また、他ブロックの同年代の講習生とも親しく接することができ、自分にもまだまだ知らない考え方、判定基準といったものなどがあることを実感しました。</p> <p>実技ではボール中心に動いてしまう場面が多く、プレイのプロセスや危険地帯の予測など、まだまだ良いスペースを捕らえるために必要なことを行っていないと感じました。また、メンタル面や動き方など外的要因によって判定を左右されてしまう部分が多いことがわかり、普段からの審判の姿勢がそのまま出ると改めて実感しました。</p> <p>講師の方々からは、「吹けた、吹けなかったではなく、『基礎・基盤』といった『原点』を作ることが大事であり、あくまで講師からの反省はそのためのヒントである。」ということをしてどの講習生にも徹底してアドバイスされていました。実技を行い講師から反省をいただくことで、今の自分の課題が明確になりました。この経験を次に繋げていきたいと思えます。</p> <p>また2日間にわたり、滅多に聞くことが出来ない講義も、私の中に大きく印象に残っています。特に、国際審判員の国際試合の経験談を聞き、これまでは上級審判に「なりたい」と憧れていた気持ちが、「なるぞ」という目標にかわりました。また、こういう講習会だけを特別視して挑戦するのではなく、普段行っている1試合1試合に挑戦する姿勢を忘れずに課題をもって頑張っていこうと思えます。</p> <p>最後にこのような貴重な場に派遣して頂き、本当にありがとうございました。次のステップに繋げてくださった講師の方々に感謝し、今の気持ちを忘れずに、これからの審判活動に繋がっていきたく思いますので、今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。</p>		

※次ページより講義内容の抜粋をメモ形式で記載してあります。

★講義Ⅰ 「ルールについて」 講師 平野 彰夫 氏（規則委員長）

1. 審判がスイッチしないケース

- ①トレイルがディフェンス・ファウルを宣したとき
- ②リードがオフェンス・ファウルを宣したとき

【理由】

- ・リードがディフェンス・ファウルを宣することが確率的に一番多い。
- ・スイッチしてしまうと同じチームのファウルを連続して吹くことになる。
- ・レポーターが宣したレフリーはリードに入らない。

2. ボクシング・イン

- ①10人を2人の視野に入れる。
- ②全て対角線になるわけではない。
- ③相手Rの気持ち・行動などを読み取る。感じ取る。
- ④選手の気持ち・行動などを読み取る。感じ取る。

★講義Ⅲ 「国際審判になるまで」 講師 中嶽 希美子 氏・久保 裕紀 氏

【中嶽氏の話】

- ①駄目でもマイナスになるのではない。成功や失敗の「経験」をすることが上達の鍵である。
- ②評価は、自分ではなく周りの人がするもの。
- ③常に誰かに見られていることを意識する。（良いところも悪いところも）
- ④さまざまな人の話を聞くことが大切。（機会があるのであれば、選手・コーチ・観客なども）
- ⑤FIBAクリニックについて
 - ・英語は必要になってからでは遅い。
 - ・英語が日常会話
 - ・上手く伝えることよりも、相手に伝えようと努力することが大切。
 - ・世界の風潮や時差などを配慮し、体調管理をしっかりする。
 - ・日本の育成プランの充実

【久保氏の話】

- ①具体的な目標を持つ。 ○○になりたい。→何をやる。・どうすればなれるかなど考える。
- ②情報源を手に入れる。 与えられたチャンスの準備 （チャンスは自ら掴むもの）
- ③有限実行 必ず良くも悪くも見ていてくれる人がいる
- ④仲間づくり 出合いを大切にする （各府県→ブロック→日本→世界）

講義Ⅳ 「英会話・英文ルールについて」 講師 佐々木 潤 氏（国際渉外委員長）

- ①国際審判には必須であり、国際試合での共通言語は英語である。
- ②試合のレベルアップに伴い、ゲーム運営を向上する必要がある。
- ③そのためには、コミュニケーションが必要
- ④ゲームコントロールだけの英語のレベル、自分の伝えたいことを伝える。
- ⑤AA級なってから勉強するのでは遅い。常に意識をすること。
- ⑥毎年AA級を対象にルールテスト（英語・FIBA）を行っている。（日本の教育制度）
- ⑦A級→AA級→国際になれるチャンスはすぐにある。
- ⑧どのように英語を学ぶか
 - ・普段の生活の中に英語を取り入れる。
 - ・ルールブック（英語）を取り入れる。
 - ・英語を外（本）→中（頭）ではなく、中（頭）→外（声に出す）にする。
- ⑨国際審判は全員にチャンスを与えられるものではない。（日本公認約6000人）
- ⑩YOCに来た人にはチャンスがあるかもしれない。
- ⑪コミュニケーションをとるために英語が必要
 - ・相手のことを知るため、自分のこと（人格）を伝えるため
 - ・笛、ウェア、シューズ等と同様に使いこなせるように。
- ⑫オフ・ザ・コートでの活用も必要